

論文要約

学位論文題目 昭和前期における口演童話の変遷——教室童話、放送童話への展開に注目して——

氏名 中村 美和子

本研究の目的は、明治期なかばすぎに発祥し、昭和初期までに児童文化の主要な柱の一つとなった口演童話について、1930年代からアジア・太平洋戦争の終結にいたる時期に注目し、どのように変遷したかを明らかにすることである。その際、口演童話の教育的な働きかけ、つまり話者である大人が次世代に何をどう伝えようとしたかに焦点をあてる。

口演童話は、録音・録画技術が一般的でない時代に数百人規模の子どもたちを集めて実演された。その場限りの娯楽的な無形文化財であるため、いまに再現されない。そこで、分析の対象としたのは関係者がのこした直筆や謄写版印刷になる童話台本、実践者と研究者たちによる研究成果の機関誌などの史料である。

先行研究の検討により、「教育としての童話」を目ざした「教室童話」への展開、口演童話家の協力に支えられたラジオ初期の子ども番組における「放送童話」への展開という、昭和前期の口演童話の二つの流れが注目された。それらをふまえ、(1)創成期に社会から「娯楽」と受けとめられていた口演童話は、教育に資するものとして教育界にどう受容されていたか、(2)初期の子ども向けラジオ放送は口演童話家の番組協力で成り立っていたといわれるが、それはどのようなありようだったか、(3)1941-1945年の国民学校放送では、どのような童話が語られたか、(4)戦時下の日本少国民文化協会童話部会の動向はどのようなものであったかという四つのリサーチクエスチョンを設定した。

分析の視角には、教育を文化のコンテキストに置き、歴史的視点で「次世代育成に関わる生活の仕方」の深層にあるものの解明を目ざす「教育文化」(宮澤 2002)の概念を用いた。また、文化を強行性と集中性をもって動員し「国民士気の昂揚」を図ろうとする「戦時文化政策」(宮原 1943)の概念を補助的に取りあげ、口演童話が置かれた歴史的な文脈、社会的な文脈を考察し、変遷の論述を試みた。研究の結果は、以下のとおりである。

第一のクエスチョン「口演童話の教育界における受容」に対しては、「人間形成を意図した教室童話の『指導精神』」という答えが得られた。分析の対象としたのは、小学校教師だった金沢嘉市(1908-1986)が教室童話研究会(1938年設立)の同人と目ざした「教育としての童話」であり、研究の結果、大正期に話しかた研究を目的として口演童話を受容した教育関係者とは異なる二つの特徴が明らかにされた。それは、①子どもの社会化を意図する「指導精神」、②指導精神を支える、ことばや物語の筋のくり返しの多用ほか教育的配慮のある表現技術である。教室童話が次世代の育成にかかわり、生きかたや生活のしかたを伝える意識の強い教育文化であったことが実証された。

第二のクエスチョン「口演童話家の初期ラジオ放送における協力」に対しては、「口演童話家による放送童話の確立」という答えが得られた。ここでは、関屋五十二(1902-1984)が子どもたちに良質な童話を提供しようと1931年に結成した東京放送童話研究会が、夕方の娯楽的な番組枠「子供の時間」で1934年から1939年にわ

たり、名作物語、偉人・英雄の物語シリーズを月 1 回提供していたことが明らかにされた。同研究会が確立した放送童話は劇形式的な演出が特徴的で、①原作の改変、②番組における学習内容の表明、③教訓的な言説が台本内容の特徴であった。同研究会は既存の口演童話団体を基盤に構成されていた。

第三のクエスチョン「国民学校放送における童話の語り」に対しては、「放送童話による戦時下の保育と教育」が明らかにされた。1941 年に学校放送から名称が変わり、文部省から正式な教材教具に認可された国民学校放送を対象とし、「幼児の時間」と小学高学年向け「国史劇」の台本分析から、次の結果が得られた。「幼児の時間」では遊びを中心とする幼児らしい生活が意識された一方で、遊びの場面にも戦時下に沿うモチーフが多用され、1943 年 10 月「教育に関する戦時非常措置方策」発表の前後からは、戦意の昂揚、銃後の心得を積極的に指導する内容が登場した。1941 年 6 月から 5・6 年生向けに 10 作品ずつ企画された「国史劇」には、大衆演劇の作家、額田六福(1890-1946)が起用され、皇国の道を歴史的に理解する「国民の思想」の教育が目ざされた。台本の特徴は、①「まごころ」による自己犠牲への期待、②感銘のある具体的事実の提供、③死にむすびつく覚悟という主題であり、教師や教歴のある口演童話家たちが、東京放送童話研究会の確立した劇形式的な演出で放送を担当した。

第四のクエスチョン「日本少国民文化協会童話部会の展開」に対しては、「日本少国民文化協会童話部会の積極的な国策への協力」が解明された。口演童話の諸団体は、1942 年発会の日本少国民文化協会(以下「少文協」)童話部会に一元化され、「童話報国」を求められることになった。童話部会の活動は、1943 年の夏ごろから少文協で中心的となり、同時期から少文協の防空対策関連事業への積極的な関与が認められ、1943 年 9 月に少文協が打ち出した「決戦即応態勢」に対して着実な役割を果たすものであった。童話部会会員による幼児向け、高学年向けの防空話材の分析から、口演童話が避難をはじめとする非常時の教育にとって機能的であり、戦時下にふさわしい幼児像、少国民像の理解に貢献するメディアであった点を実証された。

以上、四つの解題をふまえ、昭和前期の口演童話の変遷を「教育文化」、「戦時文化政策」の視角から分析した。その結果、教育関係者が多かった口演童話家たちの職業的使命感による「国民的・民族的熱意」(宮原 1943)が、当該時期の口演童話の隆盛をもたらしたことが解明された。